

国語

(古文・漢文を除く)

平成29年10月15日実施
100点満点

医療福祉専門学校

緑生館

平成30年度

●総合看護学科
●理学療法学科・作業療法学科
推薦1期・一般1期入学試験問題

[注意事項]

- 1 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 この冊子は27ページあります。問題は第1問～第2問まであります。
- 3 ページの脱落や印刷不鮮明な個所を見つけた場合には、すみやかに申し出て下さい。
- 4 解答用紙の受験番号欄等の記入に当たっては、受験票に記入した内容と同一になるように注意して下さい。提出する前にもう一度間違いがないかどうか確認して下さい。
- 5 解答は必ず指定された解答記入欄にはみ出したり、薄かったりしないようにマークして下さい。たとえば、問題の文中または文末等に **35** の表示のある問いに対する解答は、下の(例)のように解答番号 35 の解答記入欄に正確にマークして下さい。
その際、解答用紙を汚したり曲げたりしないようにして下さい。

(例)	解答番号	解 答 記 入 欄				
	35	1	2	3	4	5
		☐	☒	☐	☐	☐

(悪い例)	1	2	3	4	5	
	☐	☐	☒	☐	☐	
	1	2	3	4	5	
	☐	☐	☒	☐	☐	
	1	2	3	4	5	
	☐	☐	☒	☐	☐	
	1	2	3	4	5	
	☐	☐	☒	☐	☐	塗り残し
	1	2	3	4	5	
	☐	☐	☒	☐	☐	はみ出し
	1	2	3	4	5	
	☐	☐	☒	☐	☐	消し残し

- 6 解答用紙は鉛筆でマークした部分を機械で直接読み取りますから、[注意事項] を正しく守って下さい。とくに、訂正する場合には消しゴムでいねいに消し、消しきずはきれいに取り除いて下さい。

受験番号		氏名	

国語

（解答番号

1

）

26

）

第1問

次の文章は、小説「伊豆の踊子」の一節である。読んで、後の設問（問1～7）に答えなさい。

旧制一高（現在の東京大学）の学生である私は、一人伊豆の旅に出かけ、天城峠で五人の旅芸人と出会う。その後、一緒に旅を続けている。

山の頂上へ出た。踊子は枯草の中の腰掛けに太鼓を下すとハンカチで汗を拭いた。そして自分の足の埃を払おうとしたが、ふと私の足もとにしゃがんで袴の裾を払ってくれた。私が急に身を引いたものだから、踊子はこつんと膝を落とした。屈んだまま私の身の周りをはたいて廻ってから、掲げていた裾を下ろして、大きい息をして立っている私に、

「お掛けなさいまし。」と言った。

腰掛けの直ぐ横へ小鳥の群れが渡って来た。鳥がとまる枝の枯葉がかさかさ鳴る程静かだった。

「どうしてあんなに早くお歩きになりますの。」

踊子は暑そうだった。私が指でべんべんと太鼓を叩くと小鳥が飛び立った。

「ああ水が飲みたい。」

「見て来ましょうね。」

しかし、踊子は間もなく黄ばんだ雑木の間から空しく帰って来た。

「大島にいる時は何をしているんです。」

すると踊子は唐突に女の名前を二つ三つあげて、私に見当のつかない話を始めた。大島ではなく甲府の話らしかった。尋常二年まで通った小学校の友達のことらしかった。それを思い出すままに話すのだった。

十分程待つと若い三人が頂上に辿りついた。おふくろはそれからまた十分後れて着いた。

下りは私と栄吉とがわざと後れてゆつくり話しながら出発した。二町ばかり歩くと、下から踊子が走って来た。

「この下に泉があるんです。大急ぎでいらして下さいって、飲まずに待っていますから。」

水と聞いて私は走った。木蔭の岩の間から清水が湧いていた。泉のぐるりに女達が立っていた。

「さあお先きにお飲みなさいまし。手を入れると濁るし、女の後には汚いだろうと思つて。」とおふくろが言つた。

私は冷たい水を手にとつて飲んだ。女達は容易にそこを離れなかった。手拭いをしぼつて汗を落したりした。

その山を下りて下田街道に出ると、炭焼の煙が幾つも見えた。路傍の材木に腰を下ろして休んだ。踊子は道にしゃがみながら、

桃色の櫛で犬のむく毛を梳いてやつていた。

「歯が折れるじゃないか。」とおふくろがたしなめた。

「いいの。下田で新しいのを買うもの。」

湯ヶ野にいる時から私は、この前髪にさした櫛を貰つて行くつもりだったので、犬の毛を梳くのはいけないと思つた。

道の向う側に沢山ある篠竹の束を見て、杖に丁度いいなぞと話しながら、私と栄吉とは一足先きに立つた。踊子が走って追つて来た。自分の背より長い太い竹を持っていた。

「どうするんだ。」と栄吉が聞くと、ちよつとまごつきながら私に竹を突きつけた。

「杖に上げます。一番太いのを抜いて来た。」

「駄目だよ。太いのは盗んだと直ぐに分かつて、見られると悪いじゃないか。返してこい。」

踊子は竹束のところまで引き返すと、また走って来た。今度は中指くらいの太さの竹を私にくれた。そして田の畔に背中を打

ちつけるように倒れかけて、苦しそうな息をしながら女達を待っていた。

私と栄吉とは絶えず五六間先きを歩いてた。

「それは、抜いて金齒を入れさえすればなんでもないわ。」と、踊子の声がふと私の耳にはいったので振り返ってみると、踊子は千代子と並んで歩き、おふくろと百合子とがそれに少し後れていた。私の振り返ったのを気づかないらしく千代子が言った。

「それはそう。そう知らしてあげたらどう。」

私の噂らしい。千代子が私の齒並びの悪いことを言ったので、踊子が金齒を持ち出したのだろう。顔の話らしいが、それが苦にもならないし、聞き耳を立てる気にもならない程に、私は親しい気持ちになつてゐるのだった。暫く低い声が続いてから、踊子の言うのが聞こえた。

「いい人ね。」

「それはそう、いい人らしい。」

「ほんとうにいい人ね。いい人はいいいね。」

この物言いは単純で明けつ放しな響きを持つていた。感情の傾きをぼいと幼く投げ出して見せた声だった。私自身にも自分をいい人だと素直に感じる事が出来た。晴れ晴れと眼を上げて明るい山々を眺めた。瞼の裏が微かに痛んだ。二十歳の私は自分の性質が孤児根性で歪んでいると厳しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪え切れないで伊豆に旅に出て来ているのだった。だから、世間尋常の意味で自分がいい人に見えることは、言いようなく有難いのだった。山々の明るいのは下田の海が近づいたからだだった。私はさつきの竹の杖を振り廻しながら秋草の頭を切った。

途中、ところどころの村の入り口に立札があつた。

—— 物乞い旅芸人入るべからず。

私は、下田で一泊した後、東京に帰らなければならなくなる。

出立の朝、七時に飯を食っていると、栄吉が道から私を呼んだ。黒紋付の羽織を着込んでゐる。私を送るための礼装らしい。女達の姿が見えない。私は素早く寂しさを感じた。栄吉が部屋へ上つて来て言った。

「皆もお送りしたいのですが、昨夜晩く寝て起きられないので失礼させていただきます。冬はお待ちしているから是非と申して居りました。」

町は秋の朝風が冷たかった。栄吉は途中で敷島四箱と柿とカオールという口中清涼剤とを買つてくれた。

「妹の名が薫ですから。」と、微かに笑いながら言った。

「船の中で蜜柑はよくありませんが、柿は船酔いにいいくらいですから食べられます。」

「これを上げましょうか。」

私は烏打帽を脱いで栄吉の頭にかぶせてやった。そしてカバンの中から学校の制帽を出して鍬を伸ばしながら、二人で笑つた。乗船場に近づくと、海際にうずくまつてゐる踊子の姿が私の胸に飛び込んだ。傍に行くまで彼女はじつとしていた。黙つて頭を下げた。昨夜のままの化粧が私を一層感情的にした。眦の紅が怒っているかのような顔に幼い凛々しさを与えていた。栄吉が言つた。

「外の者も来るのか。」

踊子は頭を振つた。

「皆まだ寝ているのか。」

踊子はうなずいた。

栄吉が船の切符とはしけ券とを買いに行つた間に、私はいろいろと話しかけて見たが、踊子は堀割が海に入るところをじつと見下ろしたまま一言も言わなかつた。私の言葉が終らない先きに、何度となくくりくりうなずいて見せるだけだつた。

そこへ、

「お婆さん、この人がいいや。」と、土方風の男が私に近づいて来た。

「学生さん、東京へ行きなさるだね。あんたを見込んで頼むだがね、この婆さんを東京へ連れてつてくんねえか。可哀想な婆さんだ。倅が蓮台寺の銀山に働いていたんだがね、今度の流行性感冒で奴で倅も嫁も死んじまったんだ。こんな孫が三人も残っちまったんだ。どうにもしようがねえから、わしらが相談して国へ帰してやるところなんだ。国は水戸だがね、婆さん何も分らねえんだから、靈岸島へ着いたら、上野の駅へ行く電車に乗せてやつてくんね。面倒だろうがな、わしらが手を合わして頼みてえ。まあこの有様を見てやつてくれりゃ、可哀想だと思いなさるだろう。」

ぽかんと立っている婆さんの背には、乳呑児がくくりつけてあった。下が三つ上が五つくらいの二人の女の子が左右の手に捉まっていた。汚い風呂敷包から大きい握り飯と梅干とが見えていた。五六人の鮎夫が婆さんをいたわっていた。私は婆さんの世話を快く引き受けた。

「頼みましたぞ。」

「有難え。わしらが水戸まで送らにやなんねえんだが、そうも出来ねえでな。」などと鮎夫達はそれぞれ私に挨拶した。

はしけはひどく揺れた。踊子はやはり唇をきつと閉じたまま一方を見つめていた。私が縄梯子に捉まろうとして振り返った時、さよならを言おうとしたが、それも止して、もう一ぺんただうなずいて見せた。はしけが帰って行つた。栄吉はさつき私がやつたばかりの烏打帽をしきりに振っていた。ずっと遠ざかってから踊子が白いものを振り始めた。

汽船が下田の港を出て伊豆半島の南端がうしろに消えて行くまで、私は欄干に凭れて沖の大島を一心に眺めていた。踊子に別れたのは遠い昔であるような気持ちだった。婆さんはどうしたかと船室を覗いてみると、もう人々が車座に取り囲んで、いろいろと慰めているらしかった。私は安心して、その隣の船室にはいった。相模灘は波が高かった。坐っていると、時々左右に倒れた。

船員が小さい金だらいを配って廻った。私はカバンを枕にして横たわった。頭が空っぽで時間というものを感じなかった。涙がぼろぼろカバンに流れた。頬が冷たいのでカバンを裏返しにした程だった。私の横に少年が寝ていた。河津の工場主の息子で入学準備に東京へ行くのだったから、一高の制帽をかぶっている私に好意を感じたらしかった。少し話してから彼は言った。

「何か御不幸でもおありになったのですか。」

「いいえ、今人に別れて来たんです。」

私は非常に素直に言った。泣いているのを見られても平気だった。私は何も考えていなかった。ただ清々しい満足の中に静かに眠っているようだった。

海はいつの間に暮れたのかも知らずにいたが、網代や熱海には灯があつた。肌が寒く腹が空いた。少年が竹の皮包みを開いてくれた。私はそれが人の物であることを忘れたかのように海苔巻きのすしなぞを食った。そして少年の学生マントの中にもぐり込んだ。私はどんなに親切にされても、それを大変自然に受け入れられるような美しい空虚な気持ちだった。明日の朝早く婆さんを上野駅へ連れて行って水戸まで切符を買ってやるのも、至極あたりまえのことだと思っていた。何もかもが一つに融け合つて感じられた。

船室の洋灯が消えてしまった。船に積んだ生魚と潮の匂いが強くなった。⁽⁴⁾真つ暗ななかで少年の体温に温まりながら、私は涙を
出まかせにしていた。頭が澄んだ水になってしまつていて、それがぼろぼろ零れ、その後には何も残らないような甘い快さだった。

(川端 康成「伊豆の踊子」より)

問1 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

1

から

5

(ア) 屈んだ

1

① 事実をワイキョクする
③ クツシン運動をする

② 河川のクツサク作業
④ シンシユク性のある材質

(イ) 涌い

2

① 温水がユウシュツする
③ ユウヨウ迫らぬ態度

② ユウガな雰囲気
④ 工場のユウチ

(ウ) 汚い

3

① シュウブンが広まる
③ オカンがする

② オメイをそそぐ
④ コクハクな人柄

(エ) 微かに

4

① 必需品がカンビしている
③ 風光がメイビだ

② インビな配慮
④ 秀麗なビモク

(オ) 慰め

5

① イカンに存じます
③ 身体のイワ感

② 同じケイイをたどる
④ 辞意をイリユウする

問2 二重傍線部①～④の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

6

8

① おふくろがたしなめた

6

② 母親が厳しく叱った

③ 母親が穏やかに注意した

④ 母親が優しく促した

⑤ 母親が厳格に躰けた

⑥ 親しい気持ち

7

① 踊子たちを旅を共にする友人だと思ふ気持ち

② 学生という立場を忘れ踊子たちに好意を抱く気持ち

③ 踊子たちが身内のように思われる気持ち

④ 踊子たちを何のわだかまりもなく受け入れる気持ち

⑤ 感情の傾きをばいと幼く投げ出して見せた声

8

① 私への好意をありのまま無邪気に口に出した声

② 私への愛情を十分に表現できないまま口に出した声

③ 私への感謝を言葉少なに口に出した声

④ 私への信頼を朴訥に飾り気なく口に出した声

問3 傍線部(1)「田の畔に背中を打ちつけるように倒れかかって、苦しそうな息をしながら女達を待っていた。」とあるが、この

部分の「踊子」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

9

- ① 踊子が兄の栄吉から厳しく叱られたため、何とかして自分の失敗を取り返そうと必死になっている様子
- ② 踊子が身体の具合が悪いにもかかわらず氣力を振り絞って私と栄吉とのために役に立とうと振舞っている様子
- ③ 踊子が自分のことは擲って、私が少しでも気持ちの良い旅ができるように氣を配り、全力で尽くしている様子
- ④ 踊子が栄吉と私のために良かれと思って走り使いをしたのに栄吉から叱られて落胆のあまり動けなくなっている様子

問4 傍線部(2)「途中、ところどころの村の入り口に立札があった。」とあるが、この情景描写は物語の展開上どのような働きをしているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

10

① 旅芸人に対して世間の差別が厳然として存在していることを示すことにより、潔癖で、正義感の強い学生の私は、逆に旅芸人一行に心を寄せていくきっかけとなる働きをしている。

② 旅芸人一行が世間から疎外され、周囲から冷たくふるまわれている現状を暗示し、人を信用できず孤絶感を抱いて旅していた私の心を旅芸人一行に近づける働きをしている。

③ 旅芸人一行が社会の中で排除されていることを明示することで、旅芸人一行に対する周囲の人々の心の冷たさが隠されていることを暗々裏の裡に示そうとする働きをしている。

④ 旅芸人一行が通り過ぎていく村々で外面的には排除されているものの、実際は村の中に自由に入っていくことができたり、村のひとたちの寛容で融通の利く有様を示す働きをしている。

問5 傍線部(A)～(C)にうかがえる踊子の心境の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

11

- ① 私との別れは当然のことだと承知しており、何とか別れの言葉を話そうとしてもその言葉を見出せないでいる心境
- ② 私とはどうしても別れたくなくて、その気持ちを伝えたくてもそれが出来ずに心の平静を失っている心境
- ③ 私との別れは仕方がないと自覚しており、冬には是非島に来てくれとの思いを口に出すのを躊躇している心境
- ④ 私と別れなければならない現実を受け入れることができず、まだ一緒にいたいとの思いを秘め、じつと堪えている心境

問6 傍線部③「私は婆さんの世話を快く引き受けた」とあるが、この部分の「私」の心境の説明として最も適当なものを次の中

から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

12

① 私は、踊子に好意を抱くことで他者に対する不信感を払拭し、どんな人にも素直に接することができるようになって、土方風の男たちの要請を、いうまでもなく自分から受け入れようとする心境

② 私は、栄吉が私を一人の人間として接してくれる誠実さに触れ、人に対する警戒心がなくなり、土方風の男たちに対してごく普通に接し、困っている人に手助けするのは当然だと思う心境

③ 私は、旅芸人たちの私を信じて疑わない態度に触れて、自分を信じることができるようになり、土方風の男たちからもいい人と認められて、いい人として婆さんの世話をするのは当たり前のことだと思う心境

④ 私は、世間の理不尽な仕打ちによる旅芸人の言い知れぬ屈辱感を十分に理解できるようになり、同じ立場にいる土方風の男たちの状況に手を貸すのは人として正しいことだと思う心境

問7

傍線部(4)「真つ暗なかで少年の体温に温まりながら、私は涙を出まかせにしていた。頭が澄んだ水になってしまっていて、それがぼろぼろ零れ、その後には何も残らないような甘い快さだった。」とあるが、この部分の「私」の説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

解答番号は

13

① 他者の好意を素直に受け入れ、その有難さを無心に表出することで、自分だけが他者から孤絶しているのではなく、他者とつながっている本来の自分を回復している。

② 他者の好意がどれほど有り難いかを痛感し、自分も他者に対していい人でなければならないということを自覚し、今後そういう生き方を実践しようと思っている。

③ 他者の好意を当たり前のこととして受け入れながらも、改めてその有難さに心を動かされて、人を信じることの必要性和他者に対しては優しくあらねばならないことを実感している。

④ 他者の好意がどういうものかを初めて理解でき、あるがままにその行為を受け入れることができるようになり、人としての素直さと優しさとを取り戻している。

第2問 次の文章を読んで、後の設問（問8～14）に答えなさい。

ひとびとはよく自我の確立をいい、主体性ということばを口にする。また、学問の自由とか芸術の自由などということが、こともなげに語られる。いまの政治制度や経済機構からくる圧迫や不安を解消せしめようとするひとたちは、せめて言論の自由だけは確保しようと欲する。それまではいい。が、同時に、かれらはソ連や中共に言論の自由があるかないかについて、小さな猜疑心を働かせている。それらの国に招かれた旅行者たちの大部分が、言論の自由の所在を探ることを最大の目的としているかにみえる。あるものは、そのささいな証左を見いだして、それを楯に私たちを納得させようとかかる。あるものは、失望し、失望しながら諦める。たとえ現在は失われていても、それは過渡的な段階としてやむをえぬと考え、わずかに方向の正しさに救いを見いだそうとする。こうして書かれてきたいくつかの共産主義国見聞記に、私はほとんど興味をもたない。

私は断言してもいい。共産主義国にかれらの考えるような自由などというものがあるわけがない。なぜなら、革命はそういう自由への不信から出発し、それを否定しようとしたものだからである。そういえば、ひとびとはおそらくこう答えるだろう。いや、それは新しい意味での真の自由を獲得しようとしたものだからである。と。だが、なぜ、そうまで自由ということばに執心するのか、私にはわからない。自由という概念が、かれらと私とのあいだで食いちがつているからであろう。

かれらにとつて、自由とは対物質の問題でしかない。物質的欲望の完全な満足、それがかれらの自由である。べつのことばでいえば、社会の成員がめいめいの利己心を發揮して、他人からの待ったなしに、その欲望が充足される世界、それを最終目的として求めている。まさか、^⑨そういうお伽の国をいまだちにソ連や中共に期待するものはあるまい。そこでは、^⑩ストイックな克己心が強要されているにちがいない。ストイシズムは自由の原理であるにしても、それが強要されるというのは、つまり、自由がないということだ。それは過渡期だからではない。また、それは真の自由に到達する方向を目ざしているのでもない。私にとつて自明なことは、そこに自由がないという現状が、すでに革命にとつて最終目的なのである。なにものかによつて自由を奪われていること、それが人間の生き方だからである。

共産革命を自由思想の延長線上に考えてはならぬはずだ。が、多くのひとたちはそう考えて、なんの疑いもさしはさまぬ。なぜなら、革命後の不自由を過渡的段階と見なす逃げ道に頼っているからだ。また、そういう逃げ道に走りうるのは、自由ということをもつぱら物質的にのみ諒解しているからであり、あるいはすくなくとも、精神の自由という課題が物質的なそれによって左右されうるという唯物弁証法を、鵜のみにしているからである。かれらの脳裡においては、言論の自由ということも、じつは物質的自由への手段としてのみ考えられている。学問の自由も芸術の自由も、所詮は、だれもがうまいものが食べ、いいものが着られる社会の実現ということに帰着する。端的にいえば、自由とは快樂の自由であり、不自由とは快樂が禁ぜられている状態、もしくは邪魔物の介在する状態を意味する。

だが、自由の最後の抛りどころとして、言論の自由にすがろうとするひとたちに、私は反問したい。言論の自由は、敗北することがないのか、と。物質的自由への手段として、そこにも適者生存はないのだろうか。残存したものを、つねに適者と認める以外に、どんな方法があるうか。もしそうならば、不適者として滅びるものにとつて、言論の自由とは、いったいなにものであろうか。ひとびとはそういうものにすがりうるであろうか。それ以外にすがりうるものはないのであろうか。

^(注2)メンシェヴィキは^(注3)ボルシェヴィキに敗れた。少数者はつねに多数者に敗れ、弱者はつねに強者に敗れる。この原則はどういう世界がこようと覆ろうとはおもわれぬ。少数者と弱者にとつては、自由はついに存在しえない。が、真の意味で、自由が問題となるのは、この地点からさきにおいてである。自由はそれが奪われているものにとつてしか問題とはなりえない。二つの道がある。現実に敗れながら、しかも自己の正当さを信じぬくか、自由という概念を放棄するか、そのいずれかである。

が、そのいずれにしても、物質的自由の理念とは相反する。社会から除けものにされた自己を信じきるためには、それが錯覚にせよ、私たちは現実によって左右されない精神の自由を信じなければならない。さらにそれを放棄するためには、自由より以上の価値を信じなければならぬであろう。

現実における少数者と弱者にとつて、精神の自由こそ、唯一の抛りどころであるにしても、そういうのはかないものによって自己の正当さを信じるほどに、ひととはみずからを強者となしうるであろうか。ひとびとは、^(注4)節操などということを安易に口にする

が、時代に背く自己を基準にして、逆にその時代を裁くことが、どうしてできるだろうか。そんなことは不可能だと私はおもう。なんぴとも孤立した自己を信じることはできない。信じるにたる自己とは、なにかに支えられた自己である。私たちは、そのなにかを信じているからこそ、それに支えられた自己を信じるのだ。

もし、自由というものが、そういう支えをなしている背景の否定であり、それからの解放であるならば、それは自己の足場を崩す作業であり、結果はたんなる自己破壊に終わるほかはない。そして私たちは自由そのものを否定し、その亡霊から解放されることを欲するようになる。もし、自由というものがそういうものならば、そのほかに救いはない。が、自由とはそういうものなのである。

精神の自由の頂点においては、ひとは自己を証しするために、自己以外のなにものも必要としなくなるだろう。かれは他人を否定し、不要物と化する。物質的自由においても、それは同様である。その極限においては、それは他人の否定を意味せざるをえない。他人は自分にとって必要な物質を生産し提供する媒体にすぎず、つねに物質に置きかえられる金銭同様の抽象的存在に化してしまうのだ。資本主義社会においても、社会主義社会においても、その点に変わりはない。自分以外のすべての存在は、人間であろうと、組織であろうと、物質であろうと、ただ自己の快樂を保証するための媒体としてしか意味をもたなくなる。それが自由というものの正体であり、奉仕と屈従とを裏がえしにした生活原理にはかならない。こうしてつねに自由は、下から上に向つてのしあがろうとする奴隷の哲学を、母胎⁹⁾としてきたのである。今後³⁾も、自由の歴史は、無際限の階級交替と肅清との歴史となるう。

その間、私たちはなにを失ったか。また、なにを失うであろうか。いうまでもない。私たちは信頼感を失ったのだ。それは今後、ますます稀薄になっていくだろう。

ひとびとは自由の名のもとに奉仕を拒絶する。あるのは取引としての奉仕だけだ。なるほど、特定の個人にたいする従属的奉仕のかわりに、社会にたいする公共的奉仕の觀念が生じたというかもしれない。が、その、ひとびとという社会というのは、救世軍の共同鍋にひとしい。投げ入れたものは、必要に応じて取りかえそうという下心にすぎぬ。あくまで利害關係に基づく商取引である。

人と人との結びつきは、いまでは、ほとんど利害によるほかなにもなくなってしまったのだ。そして無条件の奉仕としての信頼感
は、無智とあなどられるしまつた。

だが、ひとびとは、社会意識をたんなる利害関係に還元してしまうことを好まない。そこにヒューマニズムなどというあいまいなことがさまよい歩く余地が生じる。が、そんなものが自由の否定的傾斜をおさえるにたる倫理的規範となりうるであろうか。もし無条件の奉仕としての信頼感が、既成秩序を維持するための欺瞞にすぎないとすれば、ヒューマニズムもまた一種の欺瞞ではなからうか。既成秩序ではないが、将来やってくるであろう、しかし、いまは存在しない、あるいは永遠にやってこない秩序のための欺瞞であるとはいえないか。

私たちは過去にたいする不信から未来への信頼を生むことはできない。身近な個人にたいする不信から社会にたいする信頼を生むことはできない。それにもかかわらず、現代の自由思想は、そういうむだな努力をしてはいないだろうか。その未来社会にたいする期待は、過去の伝統や秩序や倫理感の否定と、身近な特定の他人にたいする不信感とから出発したものではないだろうか。さらに、今日の私たちの不信は、他人に裏切られ、自分だけが貧乏くじを引くことの恐ろしさから出てはいしないか。つまりは、他人に利用されることを嫌い、他人を利用しようとする心がまえにすぎないではないか。ふたたび、自由とはそういうものなのだ。もちろん、私たちの不信感には、それだけの理由がある。が、その理由を分析し、合理化し、ひとたび、それを肯定してしまつた以上、未来社会にたいする期待すら、私たちはどこからも引きだせないのである。おそらく誤解をまねかずにはおくまいが、あの瞬間には、批判の自由という自我の特権を棄てて、既存の現実に従い、過ちを犯して顧みぬということが必要なのだ。それが倫理というものであり、掟というものではないか。私たちは倫理の不合理を批判することはできる。が、合理的な倫理などというものは、いつの時代にもあつたためしはない。なるほど、ヒューマニズムは合理的であろう。だから、それは倫理ではないし、倫理的な規制力をもちえないのだ。

既存の現実について過つということによつて、私は既成勢力の温存を擁護しようというのではない。社会の推移に応じて倫理感も変るといふようなあやふやな考えかたに、私は疑問をもつのである。それは事実でもあろう。が、それを平然と命題化しうる

のは、すでに倫理感がないからではないか。そういう連中に、私たちは社会の変革を期待することはできない。かれらのなしうることは、戦術と力による革命であり、転換と肅清とによるその維持である。私たちは社会の変革のためにも、既存の現実に従い、誤って顧みぬという倫理的な潔癖と信頼感を必要とするであろう。それが革命への潜在力となり、革命後の安定勢力ともなるのだ。

親子、夫婦のあいだでも昔の道徳をもつて裁くことはできないなどと、いかにも気のきいたことをいうが、それなら、なにによつて裁くことができるか。私たちはなにによつても裁かれはしまい。完全な自由なのである。が、だれがこの自由に堪えうるか。それに堪えうるのは、おそらく、昔の道徳をもつて裁きえぬなどいいながら、どこかでその昔の道徳によりかかつているひとたちだけであろう。もちろん、そのよりかかりは信頼感に基づくものではない。たんなる便宜⁹⁾と利害の問題である。

もし、私たちが、真に過去の道徳によつては裁きえぬことを知つたなら、同時に、また、過去の道徳によつてしか裁きえぬこともさとるであろう。私はそれがまちがつてしていると知りながら、それによつて裁かれることを欲する。なぜなら、私のうちには、新しい自分とともに古い自分が生きているからだ。たんに過去の道徳が私を裁いたのではない。古い自分が新しい自分を裁いたのである。逆に、新しい自分が古い自分を裁いたとしたら、私は自分自身の存在を失い、もちろん新しくもなりえない。

古いものが新しいものを裁くということは、それ自体としてはまちがつている。が、その原則を否定すれば、私たちは、さらにまちがいを犯すことになる。新しいものが古いものに自分を裁かしめるといふのは、過去にたいする信頼感なくしてはできぬことだからだ。そればかりではない。自分の新しさにたいする強い自信がなければ、それは不可能であろう。古いものをして新しいものを裁かしめるといふ原則を否定したとき、いいかえれば、自由の原理に身をゆだねたとき、私たちのところにやってくるものは、この自他にたいする信頼感の喪失である。現代の革命への姿勢において、私が本能的に嫌うのは、それが信頼感の喪失から出発したものであり、その意図がどうあろうと、結局は信頼感の喪失に輪をかけるものでしかないからだ。

自由の原理は私たちに快樂をもたらすかもしれぬが、⁵⁾ 信賴の原理は私たちに苦痛を与えるかもしれないが、私たちはそのさなかにおいてさえ生の充実感を受けとることができる。

(福田恒存「人間・この劇的なもの」による)

注1 ストイック …… 禁欲的で、厳格に身を持つるさま

注2 メンシェヴィキ …… 帝政ロシア時代の社会民主労働党の中の少数派

注3 ボルシェヴィキ …… レーニンを支持した革命的左翼で、ソビエト連邦の実権を握った共産党

問8 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

14

18

(ア) 証左 (シヨウサ)

14

- ① 夕日のヘンシヨウ
- ② 時代コウシヨウをする
- ③ 典拠がミシヨウである
- ④ 部下をシヨウアクする

(イ) 節操 (セツソウ)

15

- ① 帳簿をソウサする
- ② 空気がカンソウする
- ③ 幾セイソウを重ねる
- ④ 作品をソウゾウする

(ウ) 母胎 (ボタイ)

16

- ① タイダな生活
- ② 身の上がアントイである
- ③ 選手をコウタイする
- ④ 地球のタイドウ

(エ) 擁護 (ヨウゴ)

17

- ① ボンヨウならざる作品
- ② 木の葉がヨウラクする
- ③ 物質がヨウカイする
- ④ 君主をヨウリツする

(オ) 便宜 (ベンギ)

18

- ① シンギを確かめる
- ② サギに合う
- ③ 対応がジギを得ている
- ④ 風刺を目的としたギガ

問9 二重傍線部②③の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

19

21

② そういうお伽の国

19

- ① 人々の物質的な欲求が完全に満たされる実際にはあり得ない国
- ② 人々の自由を求める願望を全て許容される理想的な国
- ③ 人々の厳格な自己規制により真の自由が確保される空想の国
- ④ 人々の言論の自由が全面的に保障されている民主的な国

③ 鵜のみにしている

20

- ① 自己の判断に一貫して信頼を寄せている
- ② 不合理なことでも絶対に正しいと確信している
- ③ 真偽をよく考えずそのまま受け入れている
- ④ 倫理的な正しさを一貫して守り抜く

④ 貧乏くじを引く

21

- ① 一人だけが貧しくなる
- ② 一番損な立場に立つ
- ③ 他者のために自己を犠牲にする
- ④ とんでもない窮地に陥る

問10 傍線部(1)「精神の自由という課題が物質的なそれによって左右されうるといふ唯物弁証法」とあるが、この部分の説明とし

て最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

22

- ① 精神と物質との対立を精神に重きを置いて発展的に考える思考法
- ② 自由と自己規制との対立を自由に重きを置いて発展的に考える思考法
- ③ 自由と自己規制との対立を自己規制に重きを置いて発展的に考える思考法
- ④ 精神と物質との対立を物質に重きを置いて発展的に考える思考法

問11 傍線部(2)「言論の自由にすぎろうとするひとたちに、私は反問したい」とあるが、筆者の反問の理由の説明として最も適当

なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

23

- ① 言論の自由もその他の自由も少数者や弱者の排除と何の意味もない快樂しかもたらさないから
- ② 言論の自由は少数者や弱者には保障されておらず、さらにかれらにとって自由そのものが無意味なものでしかないから
- ③ 言論の自由を求め続けると結果的に少数者や弱者を生み出し、他者を否定するという矛盾をもたらすから
- ④ 言論の自由は所詮個人の願望を充たそうとする手段にすぎず、それがもたらすものは不信感だけだから

問12

傍線部(3)「自由の歴史は、無際限の階級交替と肅清との歴史となろう。」とあるが、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

24

① 人々が自由を求めて歩む道は、自分の願望を充たすために、自己以外の全てを否定し、他者を排除して自己の欲求を実現させていく過程を辿ること

② 人々が自由を求めて歩む道は、一人一人の願望を全てかなえるのは不可能だから、より多くの願望を取り上げるしかなく、その結果、少数者を切り捨てていく過程を辿ること

③ 人々が自由を求めて歩む道は、他者の自由を無視したり、奪ったりすることで、他者からの信頼を失い、その結果人と人とのつながりが希薄になっていく過程を辿ること

④ 人々が自由を求めて歩む道は、人々がより人間的であることを求め続けるものであるものの、思想、信条の異なるひとびとを強引に巻き込んでいく際限のない過程を辿ること

問13

傍線部(4)「合理的な倫理などというものは、いつの時代にもあったためしはない。」とあるが、この部分の「倫理」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

25

① 倫理とは、私たちが社会に対する公共的な奉仕の気持ちを堅持し、個人的な利害関係にとらわれることなく、常に公平で、公正な社会意識を持ち続ける在り方である。

② 倫理とは、私たちがより望ましい社会を実現するために、何からも拘束されず、全てにおいて自由な中でも厳しく自己規制していく潔癖な在り方である。

③ 倫理とは、私たちが社会を信頼し、社会に全力を挙げて尽くし、そこで過誤を犯したとしても、その矛盾を含めて社会を支えようという確固とした自己規制をもち続ける在り方である。

④ 倫理とは、私たちが身近な人や過去の伝統、秩序を信頼し、いま生きている現実社会の中でより人間的であろうとヒューマニズムに徹していく在り方である。

問14

傍線部⑤「信賴の原理は私たちに苦痛を与えるかもしれぬが、私たちはそのさなかにおいてさえ生の充実感を受けとることができる。」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

26

① 私たちが全てのものを丸ごと信賴すると必ず裏切られ、辛い思いを経験することがあるにしても、人や社会への信賴が逆に自分自身への信賴を生み出すものとなる。

② 私たちが既存の社会を信じ、より望ましい社会を求めて努力していく過程で、不合理なことや失敗に遭遇し辛苦を味わうこともあるが、それを乗り越えていくことで人と人との強いつながり、自分自身の存在も確固たるものとなる。

③ 私たちが身近な人を信賴することが社会への信賴を生み出し、更にはより良い未来への改革につながり、その過程で困難を伴っても自分自身の生の実感を生み出すものとなる。

④ 私たちが既存の現実を信じ、良いところは堅持し、不合理なところは是正していけば、その過程で過酷なことがあるにしても必ず自分の幸せを生み出すものとなる。